

正信念佛偈 19

■龍樹讚②

顯示難行陸路苦	難行の陸路、苦しきことを顯示して、
信樂易行水道樂	易行の水道、樂しきことを信樂せしむ。
憶念弥陀仏本願	弥陀仏の本願を憶念すれば、
自然即時入必定	自然に即のとき必定に入る。
唯能常称如來号	ただよくつねに如來の号を称して、
應報大悲弘誓恩	大悲弘誓の恩を報ずべしといへり。

現代語訳

龍樹菩薩は、難行道は苦しい陸路のようであると示し、易行道は楽しい船旅のようであるとお勧めになる。

「阿弥陀仏の本願を信じれば、おのずからただちに正定聚に入る。ただ常に阿弥陀仏の名号を称え、本願の大いなる慈悲の恩に報いるがよい」と述べられた。

○難易二道（不退転地に至る二つの仏道）

仏法に無量の門あり。世間の道に難あり易あり。陸道の歩行はすなはち苦しく、水道の乗船はすなはち樂しきがごとし。菩薩の道もまたかくのごとし。あるいは勤行精進のものあり、あるいは信方便易行をもつて疾く阿惟越致に至るものあり。（『十住毘婆沙論』「易行品」）

①難行道＝陸路（陸の道を徒步で目的地に向かって進むような困難な道）

阿惟越致地に至るには、もろもろの難行を行じ、久しくしてすなはち得べし。あるいは声聞・辟支仏地に墮す。（『十住毘婆沙論』「易行品」）

もろもろの難行を行じ	・・・諸行の難（諸）
久しくしてすなはち得べし	・・・時劫の難（久）
声聞・辟支仏地に墮す	・・・退墮の難（墮）
	⇒ 難行道には諸・久・墮の三難がある

②易行道＝水路（舟に乗って海路を進むような易しい道）

一	・・・一つの行（信心を内容とする念佛）
速	・・・速かに初地に至る
不退	・・・退転するがない
	⇒ 易行道には一・速・不退という条件を備える

信方便の易行

龍樹菩薩は易行道について「信方便易行をもつて疾く阿惟越致に至るものあり」と示し、続いてその内容として、阿弥陀仏の名号を称えることであると答えており。そのことから考えると、「信方便の易行」とは「信心を内容とする称名」、すなわち本願を信じ念佛することに他ならない。

☑本願の念佛が「易行」であるのは、その行がすべて阿弥陀仏の本願のはたらきにおいて成立しているからであり、衆生のさとりへの努力や資質等は全く関与していないからである。そのことを衆生の側からみれば「易行」という以外にはない。

「憶念弥陀仏本願」～「応報大悲弘誓恩」の四句

○「現生正定聚」および「信心正因・称名報恩」

阿弥陀仏の本願はかくのごとし、「もし人われを念じ名を称してみづから帰すれば、すなはち必定に入りて阿耨多羅三藐三菩提を得」と。このゆゑにつねに憶念すべし。（『十住毘婆沙論』「易行品」）

たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信楽して、わが国に生ぜんと欲ひて、乃至十念せん。もし生ぜずは、正覚を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く。（『仏説無量寿經』本願文）

人よくこの仏の無量力威徳を念ずれば、即時に必定に入る。このゆゑにわれつねに念じたてまつる。（『十住毘婆沙論』「易行品」）

⇒ 『仏説無量寿經』本願成就文との対応

○親鸞聖人の相承

浄土真宗の教の一である「現生正定聚（現生で仏となる身に定まる）」の根拠になっている。また、信心を得た者が即時に仏となる身に定まるのであれば、阿弥陀仏の本願には信心と称名とが誓われているけれども、称名をまたずく正定聚に住することになる。とすればその上の称名は、すでに救いにあづかった身の上として行う報恩行に他ならない。すなわち浄土真宗の宗義である「信心正因・称名報恩」の義もまた、龍樹菩薩の教の上にその根拠を見出すことができる。以上のことから、龍樹菩薩を七高僧の一人として位置づけられているのです。

生死の苦海ほとりなし ひさしくしづめるわれらをば
弥陀弘誓のふねのみぞ のせてかならずわたしける （「高僧和讃」龍樹讃）